

## 11. 家族・親族との関係

きょうだいの配偶者、あるいは、甥や姪には、ハンセン病療養所で暮らしている自分の存在がいまだに秘密にされている入所者の方が多い。長期にわたる隔離生活のあいだに、自分のちかしい肉親たちは死に絶えてしまった入所者もいる。家族・親族とは断絶したまま、音信不通になってしまった入所者もいる。《家族・親族との関係》の回復は、多くの入所者にとって、課題でありつづけている。

以下では、《家族・親族との関係》をめぐる聞き取りでの語り的一端を示していきたい。

ある入所者（男性、1940年栗生楽泉園入所）は、きょうだいはみんな自分のことを知っているが、配偶者や子どもたちに言えないきょうだいがおり、そのため、母親の葬式にも呼ばれなかったと語る。

〔きょうだいはみんな、おれのこと〕知ってるよ。だけど、いちばん末の野郎はさ、64だけどさ、子どもが3人もあって、おかみさんいるんだけどさ。そのおかみさんにはおれの話できねえって言ったよ。子どもにも言わねえんだと。だけど、おれとは年じゅう行きあってんだよ。しょっちゅう来るんだけどさ。「おめえ、自分のおっかあにもおれの病気のこと言えねえんか」ったら、「いまんとは、言えねえな。悪いけど勘弁してくれよ」なんて話してる。

〔母親が死んだときも〕もう、いま死ぬ、いま死ぬ、あと何時間しかもたんなんて、みんな教えてきてたよ。だけど、葬式は行かねえんだよ。「葬式は来ねえほうがいいから来んな」って言うから、行かねえ。

葬式には行きたかったけどさ、行かなかったんだな。行かなかったんじゃないで、行けなかったほうだな。呼んでくれなかった。「死んだけども、兄貴が来ねえほうが、楽だからな」。——そうは言わねえけどさ。言葉では言わねえけど、そうだと思うんだ、おれは。

ある入所者（男性、1944年栗生楽泉園入所）は、肉親とのつながりがまったく途絶えてしまった経緯について、つぎのように語った。

父はね、ここ〔＝栗生楽泉園〕へ、〔私が〕最初に入るときに来て、加島分館長と話をしたと。で、私が入ってすぐ、19年の10月だったか、〔もう一度面会に〕来て。で、翌年の20年の5月の8日の日だったですね、ここへ来て、「いや、東京は大変だ、空襲だ」って、そんな話をしておったです。それが最後だったです。父は忙しいのに、わざわざ、交通の便が悪い、こんな山の中へ来てくれるというのは、私は申し訳ない。父が、頭の帽子を脱いだときに、頭が真っ白になっていて。いや、これは申し訳ないという、そんな気持ちだったですね。いちばん、父が、心配、苦勞をしたと思います。申し訳ないと思っております。私は、もう来てもらわなくていいよ、と。ここへはもう来てほしいとは思わなかったです。来るどころじゃないと。そのあとしばらく、父から手紙が来なかったです。

母は、昭和24年の11月に死にました。これは父から手紙が来ましたから。

〔父については〕全然連絡もないし、おそらく死んだであろうと。そう思ってるだけです。——夢を見ましたけどね、〔昭和〕38年に。夜中に、白い装束の。父だったんじゃないかなあっていう。そんな夢を見たことなんか一度もないんだけど、そのときはどういふわけか、白い装束がばあっと浮かんできたのが、38年にあったですね。そのときに、父が死んだのかなあと、そう思ったです。それまで、そういう夢、見たことないんですけど。

〔姉と弟は、私がここに入所していることを〕知らない。知っとったら大変でしょう。これはもう、離婚になったでしょう、わかったら。〔いまでも〕知らないと思います。〔姉と弟とは音信は〕なしです、ずっと。私は、父に、「私は行方不明でもなんでもいい。そのようにしてください」と、20年の5月の8日の日に、ここに面会に来た父にそう言いましたから。父は、どうしましたか。私は空襲で死んだということにしましたか、それはわかりませんが。空襲で死んだっていうのが、いちばんいいと思いますけどね。

〔姉も弟も、私がここにいることについては〕知らないほうがいい。やはり、まだ差別があると思いますから、まだまだ。わかったら大変なことになると。みんなに迷惑かけるし、みんな、引け目を感じるんじゃないか。私が病気でこと、ここに生きてることがわかれば、私の甥っ子か、そういうのが負い目を感じていくんじゃないかと。知らないほうがいいと思っております。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、実家から親が病気だという偽電報を打ってもらって帰省したことはあるが、実際に親が亡くなったときには葬式にも帰れなかったということをつぎのように語った。

〔実際に親が亡くなったときは〕それは行かしてくれん。というのはもう、葬式になったらやね、やっぱり、村とか部落とか親戚とかいうなに来るからね。だからもう、死んでから通知があるだけでね。いついつに親が亡くなったということだけしかもう……。亡くなったから来いっていうことで行ったことは全然ないです。そやから、両親とも、死に目には会ってないですよ。

きょうだいによってね、なんていうんか、もうだいふ前からやけどね、自分の子どもを嫁がしたりなんかして、旦那とふたりになってからやね、旦那に〔ぼくのことを話して〕……。まあ、旦那かて、薄々わかってたんじゃないかなと思うけどね。で、そういうようななにでね、一部の家族では前から、子どもがおらんようになってからやね、手紙——手紙も偽名使うとるからなんやけど、電話もかけたりしとるけどね。一部の家族ではまだ、旦那とか嫁とか、自分らの子どもとかに、なんにも言うてないからね、隠してるからね。ま、隠してたって、隠しおおせてるんかどうかわかんないけどね。

ある入所者（男性、1948年栗生楽泉園入所）は、実の弟から「親とも文通するな」と言われて、家族とのつながりをいっさい失った体験について、つぎのように語った。

親きょうだいがどれだけ惨めな仕打ちを〔体験〕したかっていうことについて……。おれも弟がいるわけなんですよ。その弟とは、おれ、20歳（はたち）前に別れてるからね。そのころ、彼はもう、ソ満国境のほうへ行っていたわけ。満蒙開拓青少年義勇団ってやつで、終戦の年の春、むこうへ行ったわけよ。おれの弟は、ソ満国境のほうに、警備隊として行かされて、残ってた連中は全部南下しちゃって。で、おれの弟は、行ったっきりでもって、おいてけぼりくったわけだ。それがどういうふうにまわりまわってきたんだか知らんけれど、最後に生きていて、上海のほうから手紙がきて、うちへ。生きてたわ、ってことになって。おやじは喜んだ。そりゃあ喜ぶだろな。おれはもうこっち入っちゃってるんだし。それで、村長や親戚じゅうからみんな手紙をやるけれど、いっこうに、帰るって言わない。「最初のうちはちやほやするけれど、国へ帰ったって、慣れてくればおしまいよ」ってなこと言ってたらしい。で、「兄貴からはなんにも言ってこねえじゃねえか」って。おやじから、「おまえ、手紙書け」って。で、「おれは、とにかく、親の面倒みれない状態だから、おまえ、帰ってきて、親の面倒みてやってくれ。おれんちの財産はいくらもないけれど、財産はもちろん、おまえに、みんな一任するから。おれには権利はなんにもないということで、帰ってきて親に安心させてくれや」って言ったら、じゃあ帰ろうってことで、いちばん最後の引揚げ船で帰ってきたんですよ。〔昭和〕28年ごろかな。

弟も、満人だか支那人だかに拾われて、少し、じゃ、ご奉公、恩返しをしなければってということで、上海の病院かなんかでもって手伝ったらしいんだけどね。そこに、たまたま、日本の女性が、その彼女も、ひとりだけでいたらしくて。で、意気投合して結婚したんじゃないかな。むこうでもって、子どもつくって、引き揚げてきたんですよね。

弟は、上海にいたころは、おれと文通してたんだ、航空便で。「とにかく、兄貴の手紙を見たから、おれは帰る」ってこと、書いてきてくれたわけ。帰ってきたら、「もう、親とも文通するな」と。「兄貴の病気みたいなのを、うちからもう、二度と出さないんだから。だから、絶対、親とも文通するな」と。そんなこと言ったもんで、こんだ、おやじが怒っちゃって。弟のやろう、うちを出っちゃって。で、埼玉あたりへ行ったらしいんだよね。埼玉にいたころ、おれのおやじがときどき行ったらしいんだけれど。弟はどうとう、一回も手紙よこさねえ。兄貴はもうとにかく親とも文通するなって。

〔弟じしんが〕迫害を受けてるから、そういうことを身にしみてるわけさ。だから、二度と兄貴みたいな病気はうちから出さないぞと。兄貴は病気なんだと。彼は、医療関係の検査技師みたいなことやってるから。だから、おれから手紙もらっても、すぐ消毒するなり、焼却するなりしてしまえばいいわけだから。それぐらいのことはやりかねねえしね。やったろうし。それで、うちへ帰ってくると、こんどはそれできねえから、親とも文通するなど。そういうことらしい。いまだに来ねえんだがね。おれのほうからはやりようもないしね。

で、1400万もらったって、これ、おれひとりの権利じゃないんでね。そういう迫害にあった弟のほうがかもつかわいそうだったかもしんないんだいね。国の教育っていうのは、ひどいもんだったんだなあと思う。恨んでも恨みきれねえよね、こういうの

は。で、いずれね、個人的に、他の人を介してだけれど、弟の状態を探ってみようと思ってるんです。親たちが死んだのも教えねえんだもん。おれのほうで調べてみたら、おやじもおふくろも死んでるんだいね。おやじは、80は過ぎてたと思う。おやじのほう先死んで、おふくろのほう、平成になってから死んでるみたいだからね。

〔両親とは〕弟が帰ってきてからも文通はしてたんだけど。親はだんだんおれよりさきに年とるわけなんだから。いつまでも心配をかけていないほうがいいのかなあ、とも思ったし。それこそ自動車の免許取って2、3年ぐらいでもって、もし文通してるっていうと、おれも、車で行きたくなりゃ、そばまで行けるんだからね。車でさ。だけど、そんなことでむしろ心配かけるより、いつそのこと文通しないほうがいいかなあと思って。間違った考えだったけどね。弟の手前もあるだろうから。親がだんだんだんだん年とってきて、弟の世話になるよりしかたなくなるんだから。それでもまだおれと文通してたなんつったら、こんどは親たちの立場上うまくないだろうと。で、おれのほうからだんだんだんだん〔間遠になって〕。最初のうちは、「元気だっということだけでもいいからたまには手紙くれ」つって、おふくろ、泣いてよこしたけどね。だけど、それでもやらんほうがいいだろうと。

〔2人の妹とも、文通は〕ほとんどなし。これはみんな、嫁さんに行っちゃってるんだから、そんなことまでついたら、かえって、まずいだろうからね。むこうが困るだろうから。おれはもう、おれひとりだからいいさね。弟でさえも、おれが、「うちをついで親の面倒みてやってほしいんだ」つったら、「じゃあ帰る」つって帰ってきてくれたのに、そいつに対しても文通してねえんだからね、おれは。だから、ほかのきょうだいとは、もちろんやらない。

ある長期入所経験者（男性、1950年星塚敬愛園入所）は、兄弟とはまったくの絶縁状態になってしまったことについて、つぎのように語った。

〔父が亡くなってから〕もう30年越しましたよね。〔享年〕75歳だったから。〔だれも〕親の命日も教えてくれん。母の命日はね、1週間ぐらいしてから教えてくれたけど、父親の場合はね、それも教えてくれない。誰も、自分のきょうだいの連中も、教えてくれんで、新聞に、〇〇町の◎◎▽っていうひとが亡くなったと〔出ているのを見て〕、びっくりしちゃって。

その1週間ぐらい前に、親父の夢を見てね。病気が治って親父と抱き合ってる夢を見ました。これはもう、夢でね、よく見るんですよ。病気が治った夢、あるいは、自分が死んだ夢。それから、息子が病気になった夢。もう、いろんなね、いい夢はあんまりないけども、そういう夢。親父のね、いろんなことで迷っている夢を見ましたね。——そのあとでそういうもの〔＝新聞の死亡記事〕を見たから、“ああ、親父はやっぱり亡くなったんだな”と思って。何年前に町議会の副議長をしとった人が亡くなったと、新聞に出て。それで、ある人に電話をかけて——役場に自分の同級生がおりましたからね、〔その人に電話をかけて、確認したんです〕。もう30年前の話です。

母はね、それから4、5年たってからでしたね。77歳で、母は亡くなりましたからね。親父がそうだった〔＝まったく訃報の連絡がなかった〕から、「母が亡くなったときに

は、必ず知らせよ」と、弟たちに言うておきました。そしたら、〔葬式がすんで〕3日してから〔連絡があった〕。「3日したのは、なんでやったか？」と言ったら、「いや、あんたに知らせたんじゃ、葬儀に来るから、葬儀が済んでから知らせたんじゃ。兄貴、それは、わかってくれよ」と。うちの弟はね、県内で高校の校長しよったから。

だから、「兄貴、それは理解してくれにや困る。俺なんかの立場もあつとやからな」と。〔親の葬儀には〕みんな学校から〔教師たちが〕来ますよね。〔そこに、ハンセン病の私がいたのでは困る。〕「それを避けたかったためになにしたんじゃ。兄貴は、それくらいのことはわかるじゃろ。知らせることは知らせたじゃないか」と言うから、もうこれとケンカしよつても始まらんとおもうてね。

みんながね、「おまえの兄貴は偉かったけども、ライ病にならんかったらよかったのになあ」なんて言う。「兄貴はライ病で敬愛園にはいつとるじゃないか」と。悪いことをして刑務所に入っているよりか、まだ下ですよ、敬愛園に入っているっていうことは。それでね、勤めたかったら、当直——いまの時代とは違いまして、学校の先生たちは、みんな、割り当てで、20人おつたら20人にね、割り当てで、2人ずつね、当直しよった。布団はね、当直の布団というのがありましてね、包布（ほうふ）だけをとりにかえるような仕組み。〔しかし〕「当直したかったら、布団からなにかから〔自分で〕持って来い」と。その先生方みんながね、校長、教頭にね、申し出た。そういう問題がありました。〔弟も〕ひどいめに遭つたんですよ。

弟は、結婚も10年ぐらい遅れましてね。満州に兵隊でとられて、10年ぐらいシベリアに抑留されたんですよ。それで、将校になっておりましたから、ひどい折檻を受けた。で、30近くになってから帰ってきたわけです。学校には復職しましたが、そういうこと〔＝肉親にハンセン病患者がいることへの差別〕が始まって、もう辞めるかどうか〔の瀬戸際まで追い詰められたんですよ〕。

それで、次男坊は、「そういうことがあつても、兄貴をなに〔＝粗略に扱うことは〕したくはないけども、兄貴のせいで、なんで、これだけね、いじめられないかんか」と。「それだったら、自分は、もう生まれ変わったつもりで、名前を変える」と。で、◎◎〔という名字〕の字を略字に変え、読み方も変えまして、そして、「◎◎〇〇とは私は関係ありません」という声明のようなことまでしましてね。「◎◎じゃ食べていけない。子どもも養っていけん。先生以外の職業にいまさら就くこともできんし」と。——それはね、もう偏見差別の最たるものですよ。そうせんと勤め〔を続け〕られなかったんですよ。

〔その弟が〕跡をとつたんですよ。財産からなんからね、ほかの弟なんかにひとつもやらんで、全部ね、取って、なに〔＝相続〕したんですよ。「それだけのことをしていながら、おまえ、どうしたことをしてくれた」。私が呼びつけても来ないから、手紙に書いてね、なにしてやったのよ。そしたら、「兄貴は兄貴の考え方があるだろう」と。「私は私の考え方で◎◎家を継いだんだから。あんたはもう禁治産者ということになってね、なにしたんだから〔黙っていてくれ〕」と。

法律にどうなってるかは知らんけれども、〔ハンセン病で療養所に収容されると〕禁治産的なものになにされるんですよ。私は「財産は放棄せんぞ」と言つてね、なにしたことがあります。しかし、私の了解なしに、親父が死ぬ前にね、もう財産全部、

残らず独り占めに、家督を相続しておりました。そういうね、大（おい）それたことをしておきながら、もう少し、[人情] 味（み）のある方法をとってほしいと言ってね、だいぶんケンカしましたけれどね。[ぎゃくに]「身勝手な兄貴だ」と[非難されました]。

〔けっきょく、弟は、跡を継いだ家屋敷は〕全部処分して〔町に出ました〕。——その弟は、私よか先に死んでしまいましたけどね。

ある入所者（男性、1951年大島青松園入所）は、親の葬式に帰りたくても帰れなかったことについて、つぎのように語った。

〔私は〕バカみたいに、家族を守らなくちゃいかん、家族に迷惑をかけないようにしようって決めていました。だから、帰りたいていうの、やまやまだったよ、ホンネでは。だけど、だいいち家族が快く受け入れようとしない、ということもある。それもわかってた。両親がよく面会に来てたのは、“あんまり行かないと、戻ってくるかもしれん”というところが、あったんじゃないかというふうな感じがするのです。

そのときに、おふくろが言ったことは、「私も、もう年をとったんで、ひよっとしたら、いつ死ぬかもわからんけど、葬式には戻ってこんでもいいからな」って。母親が、何回となく、言ったね。けっきょく、「戻ってくるなよ」ということなんです。だから、両親の葬式にも、帰ることはやめました。

〔1996年に母親が亡くなったという知らせは〕すぐ来た。〔しかし、「帰ってくるな」ということを〕言外に言った。——兄貴から電話がかかってきて、「〔おふくろが〕死んだ。おまえ、葬式に帰るか？」という言い方だった。『帰るか？』ということは、帰ってくるなということかい？ 帰ってこいということかい？」「そのどちらでもない。おまえの気持ちは？」って言う。もう、ピンときたよね。みんな集まってくるでしょ、まわりも、親戚も。そこへ、やっぱり、後遺症のある顔をさらしてほしくないっていうのは、すぐ読み取れたから、「安心しろ。おれ、帰らない」って、そのときに言った。ほんとは帰りたいたい気持ち、やまやまだったけれども、おふくろが面会に来てたときに、そのときが来ることを予測して、「帰らなくてもいいよ」と、ずっと私に言い続けたこともあってね、きょうだいたちにはそのことは全然言わなかったけれども、「帰らないから安心しろ」って言ったのです。

それから、せめて墓参りにでもと思って、3年後に墓参りに帰った。そのときも、弟の嫁なんかが、あとから私のことを聞いて、ものすごいショックを受けてることを聞いてたし、生まれた家の横を素通りして墓地に行って、墓参りをした。そのときに、兄貴にだけは連絡しました。30センチくらい雪が積もってた日だった。兄貴は自転車を押して、その籠に長靴を入れて、「おまえは革靴だろう。こんな雪深いなかで濡れてしまうだろうから、長靴をもってきたから履け」って。けっきょく、兄貴の家に行って、飲んだり食ったりして帰ってきたんだけど。そのときに、兄貴が言ったことは、「おまえを、日ごろ、おれたちの家に喜んで迎えるということを、いままでしてこなかったけど、せめて、おまえが死んだときには、あの両親の墓をあけて、そこに、おまえの遺骨を入れてやるよ」と、ボソッとやった。それで、口論になった。「そんな気持ちがあるんなら、なんで、生きてるうちに、きょうでも、いまでも、家に帰って

こいと、なぜ言えんのか。おれが死んで、骨になって、ここへ入って、喜ぶと思ってるのかい。絶対、死んでも、ここには来ないぞ」って。

そういうことがあったのだけれども、だから、葬式には、いまでも帰れる状況にはない。私は、そう思ってる。だけど、兄貴は、「弟に、おれが死んだときには、ぜひ、〇〇〇を葬儀に参列させてくれって言ったんだ」って、言ってたけれど。

このことの背後には、長年にわたって、きょうだいが自分の配偶者には、この入所者の存在を「秘密」にしてきたという重い歴史があるようだ。

兄貴が結婚したときに、私のことを内密にして、結婚した。子どもができてから、話した。その女房が、「なぜ、そんな……。いま、普通の病気やのに」。よく知ってたらしい、勉強してて。「なぜ、最初から言ってくれなかったのか」と。「戸籍をみたら、あなたの弟がいた。弟のことをいっさい私に言わんから、ひょっとしたら、あなたが、犯罪を犯して、弟を殺したんじゃないかと私は思ってた。話さないから。だけど、そういうことだったのか。それだったら、なんで、結婚するときに、おれにはこういう弟がいるということ言ってくれなかったのか」って〔言われたらしい〕。

だけど、弟は、最後まで内緒にしてて。結婚して5年も6年も、もっとあとまで言わなかったのかな。ひょっと、なにかでわかって、それから大喧嘩になって、夫婦仲がおかしくなって、トラブル続きだったらしいのです。

私の妹もね、結婚するとき大変だったの。結婚話が決まって、日にちが決まって、結納をとりかわして、いよいよというときに、私のことがわかった。むこうがわの家族が、徹底的に、「どうも、わからん。なにしてるか、どこにいるかもわからんから調べよう」いうことで、親戚じゅう手分けをして徹底的に調べたら、ハンセン病にかかって、大島青松園に隔離をされてるということがわかったから、調べに行こうというので、大島青松園までやって来た。みんなで、ハンセン病の勉強したらしいのです。むこうの親戚がね。その結果、結婚に反対ということで破談にしたけれども、よく調べてみると、そういう根拠になりうる病気ではないと。いまはまったくなんの問題もない病気だということがわかったが、どうするか、ということになったのです。破談になった話が、調査の結果、もとに戻ったのです。これは、なにも反対する根拠にはならないということで、結婚を認めると。

ただ、そのときに条件がついたのは、生涯、療養所に入所中の兄貴には会ってはならないと。それを了解してくれるのであれば、親として認めると、条件を出されて、馬鹿みたいに、それを認めたのです、妹が。やっぱり、どうしても結婚したかったんだろう。いまだに、それ守ってるのです。兄貴には会わないということ。私は、バカじゃないかと思ってる。電話でも、手紙でも、会おうと思えばいつだって会えるのに……。私は「なぜか」っていうこと言わないけれどね。そういうことこそ、長兄がやるべきだと思ってるから。そういう事実が、まだ、頻繁にあるのが現実です。ハンセン病問題は、社会問題としてはまだまだ解決していない。

## 12. 退所生活の苦勞

ここでは、現在療養所に再入所されている方の、《退所生活の苦勞》の語りを示したい。ある退所経験者（男性、1964年邑久光明園退所、1991年再入所）は、社会復帰中の生活で感じていた不安について、つぎのように語った。

大阪には、26年以上おったんかな。まず〔外へ〕出て、なにがいちばん不安やったか。全部が不安やったんやけど、ああいう大都会へ出るのはじめてやから。いちばん不安やったのは、やっぱり、散髪屋。行かなあかんやろ、散髪屋はどうしても。それから、銭湯ね。ちょっとあることがあってから、医者へ行くのが、もうほんまに怖かったね。出た時分は若いし、元気やから、医者ということは全然考えんかったんやけど、ちょっとからだ病氣したり、怪我したりしたときは、やっぱり〔医者へ〕行くの、ものすごいためらったです。ちょっとぐらいの怪我やったら、もう行かんかった。

〔昭和〕39年は、長期帰省や。その〔長期外出の4年の〕間に〔光明園に〕2、3べんは帰つとるやろ。正月なんか。もう、独りの正月はかなわんから、思つて。退所扱いにしてもろたのは、それから4年ぐらいしてからやから、〔昭和〕44年か5年やと思ふけど。大丈夫やあいう診断書もろて、行ったでな。薬ももろて行ったで。で、「だいたい1年にいっぺんぐらい〔園に〕来て診察をしたほうがいいやろう」と、医師には言われとったけど、なかなかやっぱり、1年にいっぺんきて診察ちゅうのはできんかったわな。まあ、正月〔に光明園に〕来ても、お医者さんなんかは休みやろ。看護婦さんは、交代交代で出とるけど。〔退所のさいに医者からは〕特別、からだに関して、こういう仕事のほうがええんじゃないか、こういう仕事は危険じゃないかいうことは言われんかったな。

〔退所後は、すでに退所している友人の〕世話になって、仕事探してもろたな、はじめは。そやから、何軒か〔職場が〕変わって、ここに〔戻って〕来るまでおった会社へ〔勤めるようになり〕、そこで落ち着いたわな。ずうっと〔昭和〕42年からおったんやでね。25年ほどおったかな、そこに。

〔ハンセン病療養所に入所していたことは〕ずうっと隠していた。せやから、大阪府の衛生課から〔勤め先に訪ねて〕来たときは、もうびっくりした。退所した友だちに頼まれて保険証を貸したら、その友だちを診た医者から衛生課に連絡があったらしい。もう、あかん、こっちへ帰らなあかんかなと思った。結局、人違いだと言うことで、衛生課の人は帰った。

おれ、4軒〔勤め先が〕変わったでな。いちばん最初のところは、運送屋やで。その時分は、トラック乗る言うたらなんぼでもあったん、仕事。自分で言いよれたんやな。「この会社、嫌や」とか。〔先に退所した人と〕一緒に探してもろて。で、運送屋に入ったんやわな。その時分、トラックの運転手が少なかったわな。トラックに乗って、深夜便いうたら、その時分は花形ちゅうんかな。

そこ〔の会社が〕潰れて〔次の仕事を〕探すときは自分ひとりで探したで、やっぱ



り、苦労したわ、探すときは。〔仕事を探すときに困ったことは〕履歴書を書くとき。嘘書いたこともあるわ。

いちばん最初に入ったところが、1年足らずで潰れたんやわ。社長がちょっと道楽して。して、そのときは自分ひとりで探したから。いろいろ新聞見て、電話したり。そのときは住み込みやったもんで、もう期限付きでそこにおったから何日までに出なあかんちゅうことになっとるから、アパートを探すの、えらかったわな。住み込みからその仕事変わって。住み込み違うでな、そこは。そやから、住み込みするところないから自分で探さなあかんで、周旋屋へ行って、探したな。で、高いとこ借りれんもんな。経済的な余裕ないから、やっぱ、安いとこになるから。そういう面では苦労したちゅうんか。人に言わせたら、そんな苦労でもないやろ言うやろけど。

〔退所後、生活に困ったときに生活保護の申請をしたことは〕ないなあ。そういう手続きちゅうんか、経済的にしんどいときは〔生活保護を申請〕したらええちゅうことを知らんかったわな。そういう制度があるちゅうの知らんかったわな。

そりゃ、井の中の蛙みたいなもんやでえ。小さな村からこっち〔＝邑久光明園〕へ入って、ここも隔離された状態やろお。そやから、実社会のことちゅうんかな、それはやっぱり知識はなかったわな。そういう知識は。せやから、なんていうんか、大阪での27年間いうたら、そりゃ苦労もあったけど、いろいろな体験したな。

〔退所して一般社会で暮らすなかで困ったことは〕やっぱり、病院行くのが、ものすごい怖かった。ばれるんじゃないかちゅう。病院だけに、相手が。医者だけにな。

ちょっとぐらいの熱やったら、〔医者へ〕行かなかったな。怪我でもな。そやから、いちばんはじめ行ったときはな、ここ〔＝脚〕怪我したときや。この、膝の皿のとこへ鉄板を落として、なんぼか針縫って、当て木されてずっとおったでな。そのときはもう病院行かなしょうなかったんやろな。そのときは、まあ、工作中やで、労災保険もろたけどな。社長と一緒に病院まで連れて行ってってくれて。

かなり出血したでな。それ、情けないことに、血い出てるのにわからんかったんやな。痛いのがわからん、やっぱり。配達先の人に、「なんや。えらい血い出とるんやんかい」って言われて、はじめて気がついた。そのときは、もうかなり出血しとった。情けないなあ。あれだけ出血して、わからんかったんや。それ知っとなったようなふりして「ああ、大丈夫、大丈夫」ってやっとなったけど、それ言われたときはびっくりしたもん。真っ赤やったで、この靴のあたり。かなり出血しとった。で、皿やったから余計心配やったわな。皿でも割れとったら〔大変なことだし〕。それでも、得意先から会社までトラック乗って帰ったんやけど、得意先の方は「あの怪我で、ようトラックを運転して帰ったなあ」って言うもったわ。必死やったんやね、やっぱり。

〔自分の病歴や後遺症のことは〕仕事中はそんなに気にしたこと〔ない〕、慣れるにしたがって。せやけど、やっぱり、仕事終わって、飯食って帰って、夜、一人になったら、ときどきそういうことは考えた。こういうことがあったけど、ばれたんかな、っていうのは。自分で気のまわしすぎで、そういうことはあったわな。

おれ、こうして、手え悪いんやけど、周りの人は、このことは全然言わなかった。わかっとなやけど、「おまえ、手え、なんでや？」てなことは一言も言わなかったな、その27年間のあいだで。で、眉毛なんか、おれ、植えとるやろ？ このことも、なんにも言わなかった。散髪屋でも、なんにも言わなかった。散髪屋なんか、はじめはなあ、仕事就いたとこの近くで〔散髪〕しとったやろ。して、仕事変わって〔散髪屋が〕遠（とお）になったやろ。やっぱ、〔ハンセン病がばれるのが〕怖（こわ）あて、いっぺん行ったとこしか行けん。じゃから、電車乗り継いで、遠いところから通って、その散髪屋へ行った。新しいとこへ行く勇気がないんやな。やっぱり、いっぺん行って、わかっとなとこへ行ってまうな、遠（とお）おても。〔療養所外の生活が〕10年、15年になったら、もう、そんなことそう気にせんかったけど、はじめはやっぱりそういう不安いっぱいやった。

### 13. いまも残る偏見差別

さいごに、近年になっても見られた、ハンセン病患者・元患者に対する差別と偏見にまつわる体験談を、以下に示したい。

ある入所者（男性、1944年多磨全生園に入所）は、少なくとも、つい近年まで、療養所を一步外へ出ると、ハンセン病者にたいするぬきがたい偏見と差別的態度が日常的場面の随所にみられたことについて、つぎのように語った。

園でもって、いちいち出入りを咎めるっていうことがなくなっても、それから先ね、たとえば駅。券売機で切符買ったりとかなるまでは、お金を出札で払うとね、清瀬あたりの意地の悪いのはね、小さな窓口の少し内側のところへ切符を置くんですよ。そうするとここがつかえて取れない人がいるんですよ。そういう人はもうね、お金払ったらすぐね、競輪場で使う赤鉛筆、あれなめてね、これでもって搔き出すのね。で、わたしたちはさっき言った、〔昭和〕39年から、全患協のニュースね、あの原稿を代々木まで持ってったり。それから、校正のときにね、代々木まで行くんですよ。その行き帰りに、あすこをどうしても通過するわけですよ。それで、改札係がね、切符を取らないんですよ。あるいは、爪の先で取ってね、足下へ落とすんですよ。「この野郎」って……。そのうちにもう、清瀬〔駅を〕出るときにはね、切符は渡さないでそのまま持ってきちゃいました。机の引出しの中へね、清瀬の切符がだいぶ溜まっていたね。それで、今度は、楽になったでしょ。直接人から人へ、切符切らないし。あそこ〔＝自動改札機〕へ、こう、通す。ああいうふうになってしまったからね、そういうことをいまはいちいち考えないけれども、むかしはもうね、いまでもテレビ見てもね、テレビでもって、お金やりとりする、品物を店で買って。それで、あ、お金どうやって取るのか。自分が受け取るような感じ、必ずもちますよね。ほんとにね、芯までそのことがコンプレックスとなっているんだろうっていうふうに思うんですけどもね。乗り物はそれでもってだいぶ楽になりましたよね。

それから、商店やなんかでもね、ここは清瀬が近いから清瀬の店を使うんですけども、清瀬でもね、嫌う店があって。だから、あの店は行かないほうがいいぞって言ってね。行かないように、みんな、気をつけるんですよ。

予防法廃止される以前はね、つい最近までだったら、けっこう、バスレクで出歩くようになったでしょ。そうすると、帰りはどっか近くへ来て、夕御飯食べるでしょう。廃止される以前まではね、こっちのほうの食堂だとかね、「なんで、いつまで待たせるんだ」と。大勢で行くもんで。それで、酔っ払った勢いでね、「うまくもない。どうしようもない、これは」とかね、つい、言うやつがいる。そうすると、そういう機会をとらえてね、「もう、うちへは来てくれなくていいです」って断われた店が、このところだと3軒ぐらいあったみたいですよ。

で、最近、スーパーはそういう教育をしてるみたい。手をね、こういうふうに出すでしょ。そうするとこういうところから小銭が漏る場合があるのね。それだもんでね、むこうでもって、手へ乗せてくれるときにね、もう一方の手でこうやって受けてくれるのね。それで、「またおいでください」ってね。ああいう対応の仕方見てるとね、店

員に対する教育っていうの、その点でしっかりしてるんだなっていうふうに思います。スーパーは例外なしに、みんな、このごろはそういうふうには不快な感じを与えないようになりました。だから、うんと手の悪い人はね、はじめっから財布渡して、財布から取ってもらう。だから、一緒に行くと、多少わたしなんか軽いと、人の面倒見てやらなきゃならない時代っていうのが長く続いたんだけど、最近は「自分で財布渡せ」っていうようにしてね。そういうふうになってきましたね。

現在は、ファミリーレストランでもね、けっこう、やっぱり店員教育してるみたいで、そういうこと〔＝店員による差別的な対応〕はなくなったんだけどね。

ある入所者（男性、1940年栗生楽泉園入所）は、1996年の「らい予防法」廃止、2001年の熊本地裁判決以降、社会の人びとの偏見や差別的態度はかなり改善されたものの、いまなお差別は残ると、つぎのように語った。

町へ行って、物を買ってもさ、「買ってもらわんでもいい！」って、こう言ったもの。いまは、そういう店はめったにねえけど、むかしはそう言ったよ。むかしたって、10年ぐらい前はそう言ったよ。店屋によっちゃあな。物を買に行ってもさ、喜んで売ってくれる人もあるしさ、ぜんぜん売の気がねえ人もある。「そこでうろちょろしてると、いいお客が入らない」ってさ。だいたいそうなんだよ。「あれがあるか、これがあるか」なんて聞くとさ、「うちにはないよ。そんなものはうちにはないよ」って。「帰れ」とは言わないよ。なに聞いたって「ない、ない」で、「ない」ですましちゃうんだ。なけりゃ、いられねえもんな。——草津の町でも、そういう店あったね。

まだ、いまでもあるな。おれ、去年かおととしか、〇〇へ行ったんだよ。温泉街で、まんじゅうを売ってる店があったんだよ。「あすこで、まんじゅう売ってるから、おめえ、ひとつでも、まんじゅう買って食べようか」なんて言ってな、行ったんだよ。まんじゅうあるんだけど、店屋の人、どっかへスーツと行っちゃって、だれも出てこねえ。「こんちは、こんちは」っても、絶対、返事しねえ。困ったからさ、職員の人に頼んでさ、「みんなで食べたいから、まんじゅう、ひとつずつ買ってきておくれ」なんてな、職員が行ったら、ちゃんと出てきて、売ってくれたよ。なんとも言わねえけど、出てこないんだ。〔その店員は〕35、6か、40ぐらいの人だな。やっぱり、そういうのはあるんだよ。なかなかうまい具合、いかねえんさ、シャバは。

ある入所者（男性、1952年長島愛生園入所）は、いまなお、療養所の職員のなかにも、無理解な職員がいることについて、つぎのように語った。

〔「らい予防法」廃止や熊本地裁判決でも、まわりの態度に変化はとくに〕ないね。このあいだ〔ある職員に〕「あんたらが、ようけ金もらうから、わしら公務員のボーナス削られるわ」言われたのが、ちょっと印象に残るね。そういう〔ふうに〕みんな受け取るとるかなあ、と思ったね。面と向かってそんなこと言うか！ それはちょっとな、と思ったね。〔でも〕外では言うとるだろうと思うよ。職員同士、そういう話、しとると思うよ。患者に向かって面とそんなこと言う人は、少ないけどね。その人は、そん

## 国立療養所入所者調査（第2部）

なに言うんだ。「あんたらがようけ補償金もらうから、ボーナス削られたやないか」言われる。出どころ、国じゃから、一緒じゃからね。公務員、だいぶ削られたやろ、ボーナスなんか。

地域社会でも、そういうあれは、よう聞くよ。「国の保護受けとるのに、ようけ、金もらいやがって」「ええ車乗りやがって」とかね、そういうのは聞く。